心理学研究室報

令和４年度　　専修大学人間科学部心理学科
大学院文学研究科心理学専攻

Ⅰ．専修大学心理学研究室

人間科学部心理学科報告（澤 幸祐学科長）

2022年度も新型コロナウイルス感染症は影響を与え続け，12月の時点で「第８波」のただなかにある。昨年度から継続して拡大と収束を繰り返し，いまだ終息の目途はたっていないのが実状であろう。その中にあって，専修大学では感染拡大防止のために万全の対策を取りつつ，多くの科目で対面での実施が行われるなど，徐々に落ち着きを取り戻しつつあるようにも見える。

心理学科では，昨年度に引き続き上級生が中心となってフレッシュマンキャンプを２号館で開催することができた。食事や宿泊は今年度も実施することはできなかったが，新入生の横のつながりを作ること，教員や上級生との距離を縮めることなど，新入生歓迎行事としての意義は十分に果たせたと思われる。実施にあたって尽力してくれた上級生，１年生のクラス担任教員に感謝したい。

講義期間中は，少人数制を取っていることもあり，心理学科ではほとんどの科目が対面で実施された。心理学基礎実験１・２をはじめとする実習や演習の科目については昨年度から対面で実施されていたものの，講義科目についても対面で実施されたため，キャンパスで多くの学生を目にすることができたのは，教員としてとても大きな喜びであった。コロナ禍前の大学の美点を復活させつつ，教室の収容人数と履修者数に配慮して感染拡大防止措置を取りながら，新しい大学の姿を模索する１年であったように思う。

今年度は，大学祭（鳳祭）が対面で実施されたことも印象的であった。コロナ禍にあって，サークルなどの大学文化は大きなダメージを受けた。その中にあって，鳳祭が対面で実施されたことは，学業だけではない学生文化を維持・継承していくために大きな意味を持っていると考える。参加する学生の数は往時に満たなかったとしても，意義のある出来事だった。「鳳祭の準備が大変なんです，レポートの締切なんとかなりませんか」と学生から相談されたとき，内心とてもうれしかったことを覚えている。

心理学科には現在，１年次84名，２年次82名，３年次80名，４年次以上80名，合計326名が在籍している。大学院では修士課程１年次11名，２年次以上12名，博士後期課程１年次１名，３年次１名，４年次２名，５年次・６年次各１名の合計30名が在籍している。教員16名，実習助手２名の18人体制で指導・運営している。

今年度をもって吉田弘道教授がご定年を迎えられ，退職されることとなる。長年にわたる心理学科の教育に対するご尽力に感謝したい。来年度には，新たな教員を迎える予定である。吉田先生はじめ，諸先輩方が培ってこられた心理学科の教育・研究活動の美点を残しつつ，さらに発展させていけるよう努力したい。

文学研究科心理学専攻報告（加藤佑昌文学研究科委員心理学専攻主幹）

本専攻では，心理学領域における研究者や教育者，臨床心理士や公認心理師などの心理臨床家を目指す修士課程と博士後期課程の院生たちに対して，スタッフ一同チームとなって充実した教育をおこなっています。

令和４年度の大学院生の構成は，修士課程１年次11名，２年次以上12名，博士後期課程１年次１名，３年次以上５名，研究生１名が在籍し，総勢で30名でした。

院生はそれぞれが目指す専門分野の道を進むべく，日々研究や心理臨床のトレーニングに励んでいます。ここ数年の懸案事項である新型コロナウイルス感染症は，収束がいまだ見えず，飲食を交えた懇親会や大人数で集まっての研究発表会などは，残念ながら今年度も実施できませんでした。それでもこれまでの感染症対策の経験を活かし，対面授業や外部施設での実習を実施できるよう，関係各所と密に連絡・連携を取り合うことで，徐々に以前のような学修機会を持てるようにもなってきています。不便な状況が続きますが，兼任教員および外部実習施設の皆様のご協力，そして院生たちの頑張りによって，従来の水準を落とさずに研究活動を進められ，規程の臨床心理実習の内容や時間数をクリアすることができました。この場をお借りし，深く感謝申し上げます。

Ⅱ．心理学教員研究室報告

池田研究室（発達心理学）

本研究室では，広く，ヒトの発達に関する研究を行っています。2022年度は教員１名と学部生11名（４年生：５名，３年生：６名）の体制です。４年生の卒論テーマは，幼児を対象とした実験では，音楽聴取が実行機能に与える影響や，モラルライセンシング効果が他者の印象評価に与える影響などです。他にも，大学生を対象とした自我消耗の検討や，被害者の社会的地位が加害者への罰の程度に与える影響の検討などさまざまです。

夏休み中にはサテライトキャンパスにて，子ども実験のイベントを開催した他，学内で卒論の進捗報告やプレ卒の計画の発表を行いました。徐々に対面での子ども実験もやりやすくなってきているので，この調子で，子どもを対象とした実験を活発に行っていきたいと考えています。

諸活動

Ikeda, A., & Okumura, Y. (2022). Third-party punishment for bystanders by children. (Budapest CEU Conference on Cognition Development (BCCCD22), Budapest, Hungary, January 10-14, 2020)

Ikeda, A., Kanakogi, Y., & Hirai, M. (2022). Visual perspective-taking ability in 7-and 12-month-old infants. Plos ONE, 17 (2), e0263653.

池田彩夏 . (2022). 集団内での行動調整の発達：自己のための行動調整と集団のための行動調整 . 専修人間科学論集心

理学篇 . 12（1), 33-44.

池田彩夏・奥村優子（2022）．6－8歳児における傍観者に対する賞罰の判断の検討 . 赤ちゃん学会第22回学術集会（自治医科大学 2022. 7. 2-3）

石金研究室（生理心理学・認知脳科学）

私たちの研究室では，心理学で取り扱う多様なトピックについて，脳活動やニューロンの活動からその処理メカニズムを明らかにする研究を行っています。今年度の人員構成は，教員１名，テクニカルスタッフ１名，大学院修士課程１名，学部生10名でした。情報処理中の人間の脳活動を脳波やNIRS（近赤外線光を用いた脳計測）により測定する研究と，動物を使用して電気生理学実験と行動実験を組み合わせて用いることで，視覚システムや行動の神経基盤を調べる研究を行っています。脳活動を測定する研究では，人間が何かを見たり注意を向けたりした時に活動する脳の領域とその特性を調べています。また，視覚システムや行動の神経基盤を調べる研究では，視覚誘発性行動と神経活動との関連から，視知覚成立の基礎となるメカニズムを解明することを目指しています。今年の卒業論文研究では，動物の視覚系ニューロンから活動電位を記録して集団的符号化の様式を調べる研究，錯視を動物で比較検討する研究，課題遂行中の音楽聴取とストレスとの関連を調べる研究，文字認知を脳波で調べる研究，マスキングにより閾下提示された刺激が意思決定に及ぼす影響を調べる研究等がテーマとなりました。夏のゼミ合宿は開催を検討しましたが，残念ながら実施出来ませんでした。学生の皆さんは自らの力で調べ，積極的に研究を進めることのできた１年でした。

諸活動

論文

Morizawa, Y.M., Matsumoto, M., Nakashima, Y., Endo, N., Aida, T., Ishikane, H., Beppu, K., Moritoh, S., Inada, H., Osumi, N., Shigetomi, E., Koizumi, S., Yang, G., Hirai, H., Tanaka, K., Tanaka, K.F., Ohno, N., Fukazawa, Y., & Matsui, K.（in press）. Synaptic pruning through glial synapse engulfment upon motor learning. *Nature Neuroscience*.

招待講演

石金浩史（2022）. 視覚初期過程における特徴抽出と情報表現 . 日本基礎心理学会40周年記念事業「大会優秀発表賞にみる基礎心理学の歩み」，2022年２月26日，オンライン.

社会的活動

日本基礎心理学会 常務理事

公益社団法人 日本心理学会 代議員

公益社団法人 日本心理学会 選挙制度検討ワーキンググループ 座長

公益社団法人 日本心理学会 選挙管理委員会

大久保研究室（認知心理学）

私たちの研究室では心の情報処理を研究しています。2022年度の人員構成は，教授１名，助教１名，大学院生３名（博士課程１名，修士課程２名），学部生10名でした。一昨年からコロナ，コロナの毎日です。とはいえ，過去２年と比べるとだいぶ元に戻ってきました。キャンパスには人が増えましたし，対面での実験も，室内の人数や換気に気を配る必要はありますが，なんとか実施できるようになってきました。

少しずつ研究も進み，今年度は大学院生たちも久々に対面で開催される学会で発表ができました。発表された成果の中にはすでに国際的な学術誌に投稿され，採択されたものもあります。大学院生以上のメンバーは，今年度に少なくとも１編は共著で論文を出せたので，なかなか良かったのではないでしょうか。

学部生も卒業論文に向けて頑張っています。とはいえ，この原稿執筆時には誰もまだ実験を始めておらず先は読めない状況です。まあ，４年生は仲が良いので助け合えば大丈夫でしょう。あまり心配はしていません。

３年生は入学時からコロナ禍だった学年ですし，今でも親睦行事はやりにくいので打ち解けるのに時間がかかりました。それでもグループワークを取り入れるようになってから，だいぶコミュニケーションが活発になってきたように思います。

そうそう，今年度は３年ぶりに２泊３日のゼミ合宿を行うことができました。飲み会禁止など色々制約も多かったですが，千葉の白子までで出かけ勉強に遊びにと，できる範囲で楽しく過ごせたと思います。発表の合間に温泉に入り，BBQ をやり，鴨川シーワールドにまで行きました。こういうのがとても大切だと思います。

研究活動

Okubo, M.（2022）. Standing right: Laterality of combat stance in Brazilian jiu-jitsu. *ARCHIVES OF BUDO*, *18*, 71–76.

Saneyoshi, A., Okubo, M., Suzuki, H., Oyama, T., & Laeng, B.（2022）. The other-race effect in the uncanny valley. *International Journal of Human-Computer Studies,* 166, 102871.

大久保街亜・田中嘉彦・鳥山理恵・石川健太（2022）. 日本語版ウォータールー利き足質問紙の作成．心理学研究 , 93（3), 240–248.

Suzuki, A., Ishikawa, K., & Okubo, M.（2022）. Age-related improvement in face-based trustworthiness judgment: A comparison of younger, middle-aged, and older adults. The 63rd annual meeting of Psychonomic Society, Sheraton Boston Hotel & Online.

Tanaka, Y., Ishikawa, K., Oyama, T., & Okubo, M.（2022）. Are eyes special? The reversed spatial Stroop effect on gaze and tongue Targets. The 63rd annual meeting of Psychonomic Society, Sheraton Boston Hotel & Online.

Oyama, T., Ishikawa, K., Okubo, M.（2022）. Gaze cues trig-

ger social facilitation. The 63rd annual meeting of Psychonomic Society, Sheraton Boston Hotel & Online.

Ishikawa, K., Oyama, T., Tanaka, Y., & Okubo, M. Are you looking at me? Animal gaze produces the reversed spatial Stroop effect in spatial Stroop task. The 63rd annual meeting of Psychonomic Society, Sheraton Boston Hotel & Online.

大久保街亜・石川健太・小山貴士・田中嘉彦（2022）．信頼できる表情における形態的特徴：信頼・裏切り・瞳孔散大．電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーション基礎 2022年５月研究会，沖縄産業支援センター．

石川健太・小山貴士・田中嘉彦・大久保街亜（2022）．さまざまな視線に対するヒトの注意特性．電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーション基礎 2022年５月研究会，沖縄産業支援センター．

小山貴士・石川健太・大久保街亜（2022）．視線手がかり課題における社会的促進．電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーション基礎 2022年５月研究会，沖縄産業支援センター．

田中嘉彦・石川健太・小山貴士・大久保街亜（2022）．視線知覚におけるパーツベースの処理：視線空間ストループ課題による検討．電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーション基礎 2022年５月研究会，沖縄産業支援センター．

大久保京子・中原孝信・奥瀬喜之・大久保街亜（2022）．製品選択と眼球運動に関する探索的研究．消費者行動学会：2022消費者行動研究コンファレンス．専修大学神田キャンパス

石川健太・末木新・小山貴士・大久保街亜（2022）．実験的な手続きを用いた自殺の対人関係理論の検証：社交不安が所属感の減弱と負担感の知覚に与える効果．日本心理学会第86回大会．日本大学文理学部．

鈴木敦命・石川健太・大久保街亜（2022）．顔信頼性印象の正確性とメタ正確性の年齢関連差．日本心理学会第86回大会．日本大学文理学部．

小山貴士・石川健太・大久保街亜（2022）．視線手がかりが誘発するパフォーマンス向上．日本心理学会第86回大会．日本大学文理学部．

田中嘉彦・石川健太・小山貴士・大久保街亜（2022）．視線のパーツベース処理が逆空間ストループ効果を生じる 倒立顔効果による検討．日本心理学会第86回大会．日本大学文理学部．

田中嘉彦・石川健太・小山貴士・大久保街亜（2022）．視線は特別か？視線と下による逆空間ストループ効果．日本基礎心理学会第41回大会．千葉大学．

岡村研究室（リハビリテーション心理学）

研究室で取り組んでいる研究の対象は，小児から成人までリハビリテーションの対象となる障害を抱える人々です。さまざまな障害に対して心理的な構造を明らかにして，どんなアプローチができるのかについて研究しています。研究室には修士２年１名，修士１年１名，学部４年６名，学部３年６名です。それぞれ自分のテーマを見つけて研究に取り組んでいます。ようやく今年度はコロナ禍以前の活動もできるようになってきました。夏にゼミ合宿を行い，10月には国際福祉機器展に参加することもできました。12月には大学院生は学会に参加します。学部生も大学院生も，今後も，体験の中から本当に必要なこと，興味の持てることをテーマに研究をしていきたいと思います。

私自身の専門は，臨床神経心理学で，中でも脳損傷に起因する高次脳機能障害者に対する神経心理学的アセスメント，認知リハビリテーションが研究対象です。また，臨床神経心理士資格が今年立ち上がりましたが，臨床神経心理士のアイデンティティについても研究しています。来年度こそ，専修大学心理教育相談室で高齢の高次脳機能障害者対象のグループ訓練，小児高次脳機能障害ご家族の会の支援など，実践的な活動を行っていきたいと思います。

諸活動

リハビリテーション心理職会運営委員

川崎市高次脳機能障害のある子どもの家族の会“エルダーフラワー”顧問

研究活動

岡村陽子（2022） 専修大学心理教育相談室認知訓練教室の効果及び意義の検討．人文科学年報，52，87-108.

Okamura, Y., Ehara, M., Nakajima, Y., Otsuka, E., Akaishi, M., & Yoshinaga, K.（2022）Comparison of the Behavior Rating Inventory of Executive Function in a Japanese Sample and the Original American Sample. Bulletin of Senshu University school of human sciences. Psychology, 12，1 -7.

加藤研究室（心理査定学）

加藤研究室では，心理査定学（臨床心理アセスメント）について学んでいます。具体的には，いくつかの主要な心理検査を実際に体験したり，主に表れた症状や問題の背景にある心の働きについて考えたりしながら，「臨床心理学的なものの見方・考え方の基礎」を身につけることを目指しています。これらの視点の基礎になっているのは，精神分析的な理解です。

私個人の研究テーマは若手心理臨床家への臨床心理アセスメントやロールシャッハ・テストに関する初期教育法の検討であり，若手心理臨床家への教育実践と研究を並行しておこなっています。特に，ベテランの心理臨床家の「立体的」「同時並行的」な思考過程を，若手や初学者にも分かりやすいように「平面展開図的」「継時段階的」に整理することについて継続的に研究しています。

令和４年度の当研究室の人員構成は，教員１名，大学院修士課程４名，学部生12名（４年生５名，３年生７名）でした。大学院生と学部生は，上記の学びをもとに思い思いのテーマを見つけて研究を進めています。

諸活動

＜共訳＞

Sedlak, V.（2019）. *The Psychoanalyst's Superegos, Ego Ideals and Blind Spots: The Emotional Development of the Clinician*. London: Routledge.（ヴィック・セドラック 乾吉佑（監訳）五十嵐庸介・加藤佑昌・富田悠生・橋爪龍太郎・横川滋章（訳）（2022）. 心理療法家の情緒的成熟――逆転移に含まれた超自我，自我理想，盲点を考える――創元社）

＜論文＞

加藤佑昌（2022）. 面接の引き継ぎに関する一考察　専修人間科学論集心理学篇，*12*，25-32.

＜学会発表＞

Kato, Y. & Mabuchi, S., Katsuki, N., Furuta, M., Inoue, M.（2022）. Changes in a compulsive woman through her psychotherapy as seen from differences in Rorschach test. XXIII Congress of the International Society for the Rorschach and Projective Methods. Geneve. July 11th - 15th 2022.

加藤佑昌・榊原久直・鈴木華子・田中健史朗・日野映・藤野陽生・古川裕之（2022）. 若手の会企画：若手の心理臨床懇話会「若手心理臨床家は何を感じ，何を求めるか」企画・進行 日本心理臨床学会第41回大会神戸 神戸ポートピアホテル 2022年10月１日

社会的活動

日本心理臨床学会 若手の会 幹事

多摩精神分析セミナー 事務局・講師

国里研究室（臨床心理学）

私たちの研究室は，計算論的アプローチを用いて，不安や抑うつの発症・維持メカニズムや認知行動療法の作用メカニズムを明らかにすることを目的としています。サブテーマとして，再現可能性のある心理学研究法やオープンサイエンスについても取り組んでいます。また，2022年度から，JSTの社会技術研究開発センター（RISTEX）「オールマイノリティプロジェクト：発達障害者を始めとするマイノリティが社会的孤立・孤独に陥らない認知行動療法を用いた社会ネットワークづくり（研究代表者：千葉大学・大島郁葉）」に採択されましたので，スティグマ研究についても取り組み始めています。

2022年度の人員構成は，教員１名，ポスドク１名，大学院生４名（修士１年：２名，修士２年：１名，博士６年：１名），学部生８名（３年：６名，４年：５名，５年：１名）でした。４年生は，関心のあるテーマについて先行研究を調べて調査をしたり，経験サンプリングを用いた個別性を考慮した心理的ネットワークの検討をしたり，微分方程式を用いたシミュレーションなどをしました。それぞれ挑戦があり，私もワクワクしました。３年生は，演習課題などを通して研究に必要なスキルを身につけた上で，各自の関心に合わせて徐々に研究テーマを絞りました。今年は，Ising モデルなどを使った研究への取り組みもあり，私も新たに学ぶことが多かったです。大学院生は，臨床心理学に関する専門的知識を学ぶとともに，修士・博士論文の研究を行いました。本年度は，諸事情があり，残念ながら学会発表はできませんでした。実習も忙しく，新型コロナウイルス感染症の影響もあり，なかなか研究や学会発表も難しい状況下ですが，次年度は大学院生の学会活動が再開できたらと思います。

今年度も夏に新型コロナウイルス感染症の感染が広がり，ゼミ合宿はできなかったので，夏休み中に１日ゼミを行いました。来年度はゼミ合宿ができることを願っています。本研究室は，今年で10年目となります。最近は，再現可能性と計算論的アプローチの２つの軸が研究室の中で出来てきました。次年度以降も，この２つの方向性で研究を深めていけたらと思います。

諸活動

書籍

国里愛彦（2022）.「第５章　神経科学研究」岩壁茂・杉浦義典（編）『現代の臨床心理学　4　臨床心理学研究法』 東京大学出版会，pp.195-210.

国里愛彦（2022）.「第５章　気質とパーソナリティ」Chen, X & Schmidt, L.A.（著）『児童心理学・発達科学ハンドブック【第３巻】』リチャード・M・ラーナー（編集主幹），マイケル・E・ラム（編），二宮克美・子安増生（監訳），小塩真司・仲真紀子（編訳），福村出版，pp.220-286.

論文

Kowal, M., ... Kunisato, Y., ...Zumárraga-Espinosa, M.（in press）Predictors of Enhancing Human Physical Attractiveness: Data from 93 Countries. Evolution and Human Behavior.

Dorison, C.A., Lerner, J.S., Heller, B.H ... Kunisato, Y., ... Nicholas A. Coles（2022）. In COVID-19 Health Messaging, Loss Framing Increases Anxiety with Little-to-No Concomitant Benefits: Experimental Evidence from 84 Countries. Affective Science.

Hasegawa, A., Oura, S., Yamamoto, T., Kunisato, Y., Fukui, Y.（2022）Preliminary validation of the self-report measure assessing experiences of negative independent and dependent event frequency in japanese university students. Journal of Rational-Emotive & Cognitive-Behavior Therapy.

Psychological Science Accelerator Self-Determination Theory Collaboration（2022）. A global experiment on motivating social distancing during the COVID-19 pandemic. Proceedings of the National Academy of Sciences, 119（22）, e2111091119.

Somatori, K. & Kunisato, Y.（2022）Metacognitive Ability and the Precision of Confidence. Frontiers in Human Neuroscience.

Hasegawa, A., Oura, S., Yamamoto, T., Kunisato, Y., Matsu-

da, Y., & Adachi, M.（2022）Causes and consequences of stress generation: Longitudinal associations of negative events, aggressive behaviors, rumination, and depressive symptoms. Current Psychology.
宮崎友里・重松潤・大井瞳・笹森千佳歩・山田美紗子・高階光梨・国里愛彦・井上真里・竹林由武・宋龍平・中島俊・堀越勝・久我弘典（印刷中）．心理療法におけるインフォームド・コンセント（Informed Consent：IC）の役割と最近の動向：ナラティブレビュー 認知行動療法研究
国里愛彦・土屋政雄（2022）．認知行動療法における研究の再現可能性を高める　認知行動療法研究，48（２），113-122.
井上のどか・飯島雄大・国里愛彦（2022）．摂食行動の情動調節効果における有効性認知及び食事時間の関連の検討 感情心理学研究，29（１），９-15.
国里愛彦・片平健太郎・沖村宰・山下祐一（2022）．認知行動療法に対する計算論的アプローチ　認知行動療法研究，48（１），１-10.
国里愛彦・山本哲也（2021）．マインドフルネス研究の未来を切り開く新たな方法論　心理学評論，64（４），599-618.
国里愛彦（2021）恐怖の再発と潜在原因モデル：計算論的精神医学入門　基礎心理学研究，40（１），50-53.
国里愛彦・遠山朝子（2021）心身医学研究とオープンサイエンス　心身医学研究，61，689-693.

学会発表

国里愛彦（2022）．オープンにコラボすることで世界に貢献する知を創出する仕組みを考える シンポジウム「日本認知・行動療法学会の価値の明確化」日本認知・行動療法学会第48回大会 宮崎　2022年９月30日から11月14日
竹林由武・国里愛彦（2022）．心理ネットワーク分析　シンポジウム「Process-Based Therapy とは何か？その概要と発展可能性を議論する」日本認知・行動療法学会第48回大会　宮崎　2022年９月30日から11月14日
国里愛彦（2022）．WS「認知行動療法における計算論的アプローチ：計算論的精神医学入門」 日本認知・行動療法学会第48回大会　宮崎　2022年９月30日から11月14日
国里愛彦（2022）．WS「臨床研究の方法論と倫理（臨床実践における倫理を含む）」 日本認知・行動療法学会第48回大会　宮崎　2022年９月30日から11月14日
国里愛彦（2022）．委員会企画シンポジウム「研究活動のダイバーシティ －持続可能な論文執筆に向けて－」司会 日本認知・行動療法学会第48回大会　宮崎　2022年９月30日から11月14日
国里愛彦（2022）．チュートリアルワークショップ「心理学研究における研究室インフラの整備」日本心理学会第86回大会 東京（日本大学）　2022年９月10日
国里愛彦（2022）．シンポジウム「英語論文投稿への道2022」 企画者・指定討論者　日本心理学会第86回大会 東京（日本大学）　2022年９月８日
国里愛彦（2022）．横断的ネットワーク解析：基礎編 チュートリアルワークショップ「心理ネットワークアプローチ入門」 東京（日本大学）　2022年９月10日から10月31日
国里愛彦（2022）．シンポジウム「知覚・認知・社会・発達・臨床心理学におけるオンライン実験の苦悩と工夫：心理学教育・研究のあり方の将来展望」 指定討論　東京（日本大学）　2022年９月10日から10月31日
国里愛彦（2022）．シンポジウム「情報科学とロボット工学が拓く発達・知覚・臨床心理学の新たな学術領域」 指定討論　東京（日本大学）　2022年９月10日から10月31日
国里愛彦（2022）．オープンデータ・オープンマテリアルの活用と課題　実行委員会企画シンポジウム「テスト学におけるオープンサイエンス　日本テスト学会第20回大会 2022年９月４日
伊藤正哉，西村拓一，中島俊，竹林由武，古徳純一，村中誠司，樫原潤，国里愛彦，菅原大地（2022）．企画セッション「デジタル－人間融合による精神の超高精細ケア：多種・大量・精密データ戦略の構築」 企画オーガナイザー 2022年度人工知能学会全国大会（第36回）京都　京都国際会議場　2022年６月17日
国里愛彦（2022）メタ分析論文の書き方　日本商業学会関東部会チュートリアルセッション　2022年３月12日

社会的活動

日本認知・行動療法学会　理事
日本心理学会　編集委員会　Japanese Psychological Research　副委員長
公認心理師養成大学教員連絡協議会　広報委員会　副委員長
公認心理師の会　理事

小杉研究室（心理統計法）

心理統計法の研究は，心理学のどの領域でも必要とされるデータの収集，分析に関する技術や理論を研究するものです。令和４年度の人員構成は，10名の学部学生とともに学んでまいりました。

今年度はゼミを対面で運用することができ，自由闊達な議論をする雰囲気が帰ってきました。夏にはゼミ合宿をすることができ，学生それぞれが自分の卒業研究や，エントリーしたデータ解析コンペの課題に取り組むなど，充実した時間を過ごすことができました。オンラインでも研究・教育水準が落ちないように心がけてきたつもりですが，学生同士の交流や研究室全体での雰囲気を見ると，やはり対面で直接人と人とがコミュニケーションすることが，研究教育の基本であろうと思います。

卒論生の研究テーマは認知実験や質問紙調査など，必ずしも最先端の心理統計技術を応用するものばかりではありません。もちろんベイジアンモデリングをテーマに取り組む者もいますが，自分自身の研究に適した手法であることが何より重要なことと思います。

諸活動
論文
越智宏朗・小杉考司（2022）最後通牒ゲームにおける分配行動に第三者の存在が与える影響，専修人間科学論集心理学篇，12，45-50.

学会発表
日本運動生理学会教育講演，統計的推論と判断のこれまでとこれから，2022.08.26（北海道教育大学岩見沢校，ハイブリッド開催）
寄稿
小杉考司（2022）構造方程式モデリングの基礎，精神科，41（6），785-790.

社会的活動
行動計量学会理事
社会心理学会和文誌編集委員
公益社団法人日本心理学会教育研究委員会心理統計法標準カリキュラム作成小委員会

澤研究室（学習心理学）

私たちの研究室では，主にヒトや動物が経験によって行動を変えていく学習という現象について研究しています。2022年は，教員１名，大学院生２名（博士課程２名），学部生８名という構成でした。ラットを用いた目標指向行動と習慣的行動の獲得に関する学習心理学的研究や，自己主体感のような主観的経験に関する動物研究を進めつつ，ヘッドマウントディスプレイを用いたヒトの恐怖条件づけ研究や Nintendo Switch を用いて課題を作成した行動分析学的研究など，さまざまな研究を行っています。

諸活動
学会発表：
寺尾真実・古家宏樹・山田光彦・澤幸祐（2022).NMDA 型グルタミン酸受容体遮断はラットの Sense of Agency を減衰させる 日本心理学会第86回大会
二瓶正登・北條大樹・福田実奈・松本昇・澤幸祐（2022）．恐怖条件づけにおける学習曲線の記述と分類 日本行動分析学会第40回年次大会
リギョクリュウ・澤幸祐（2022）．アクションゲームを用いた work ethics の検討 日本行動分析学会第40回年次大会

下斗米研究室（社会心理学）

下斗米研では，伝統的に，人の社会的環境への適応過程を研究しています。令和４年度の室員構成は，教員１名，大学院博士課程１名，修士課程２名，学部生８名（４年５名，３年６名）でした。今年度も，（１）理性的で快適な人間関係や集団の形成条件を見いだすこと，（２）対人関係や集団成員の苦悩防止と自己発達・成長方策の探索，（３）差別や排斥，葛藤や紛争なく，集団や個人らしさを大切にした協調的社会を構築するための必要条件を見いだすこと，という３つの研究室伝統テーマのもと，調査や実験による研究活動が積極的に進められました。

今年度は対面でゼミ活動が展開できましたので，合評形式とともに一人一人の問題意識の醸成や研究相談を個別に行うことができました。４年生は，年度当初まだ十分な問題意識と RQ が作られているとは言いがたい状態でしたので，一から議論を重ねていきましたが，着実に研究を精緻化させていき，意義ある研究成果を上げることができました。指導内容を自分のものにしていく成長した姿に，立派だったと褒めたい気持ちです。また３年生は自身の問題意識をもち，オリジナリティのある RQ のもとで研究計画の立案に取り組むまでになりました。議論を通して理解を深め，研究を主体的に進めていくことの愉しさを実感してもらえたのではないかと思っています。大学院生はそれぞれより高みを目指して研究を進め，自身の理論的枠組みをもちつつあり，今後更に飛躍してもらえることを大いに期待できます。昨年度国内研究員として研究指導はわずかにメールでのやりとりでしかできませんでしたが，二人三脚のように教員と取り組み，また室員同士が合評会を中心に議論を深め，互いを高め合っていくという社会心理学研究室の伝統は，１年間をおきましたが，今年度においてより復活したのではないかと思います。

室員の研究成果の一端は，*Social Psychology Bulletin of Shimotomai Laboratory*, Vol. 12, March, 2022において公刊されています。新歓コンパ，夏合宿，追いコンは自粛になり，エンドレスの合評会などもできませんでしたが，それらに代わる充実した時間を過ごしてもらえたのであれば，大変うれしく思います。

諸活動
著作
下斗米淳（2022）．喫煙者の生活空間がたばこの嗜好性認知に及ぼす効果　専修人間科学論集心理学篇，12（１），９-24.
下斗米淳（2021）．加熱式たばこの嗜好性は何か：紙巻きたばこ及び加熱式ブランド間の比較を通して　専修大学人文科学年報，52，139-162.
後藤日奈子・松嶋祐子・下斗米淳.（2022）．社会的排除による傷つきに対する効果的サポートの検討　専修人間科学論集心理学篇，12（１），59-68.
吉田光成・山田茉奈・下斗米淳.（2022）．向けられた好意を拒絶することは苦しいことなのか？（３）―恋愛における“蛙化現象”の生起要因としての個人特性の影響に関する定量的検討―．日本教育心理学会第64回総会論文集，PC031.

社会活動
日本学術振興会特別研究員等審査会専門委員
家庭裁判所調査官試験委員会臨時審査委員（２次試験）

高田研究室（深層心理学）

院生３名，学部生11名のゼミとなりました。今年こそは合

宿や歓迎会などができるかと思っていたのですが，叶わず，３年生，４年生のつながりがどうなるか気になっていました。しかしゼミを通して共同でする作業などで楽しそうにやれている様子にホッとしました。

また，３大学合同の試行カウンセリングですが，今年もオンラインで，大妻女子大学，お茶の水女子大学，専修大学のＭ１で行いました。オンラインでのカウンセリングには慣れてきている印象もありますが，共通理解がうまくいかなかったときに対面であればもう少し伝わるのではないかと思われるケースもあり，オンラインによるカウンセリングの課題とも言えそうです。今後検討したいと思っています。

諸活動

日本箱庭療法第35回大会　研究発表司会「HIV 陽性者の理解に関わる表現の多層性－描画を中心とした多面的指標を手掛かりに－」荒木浩子（追手門学院大学）（2022年10月於：鳴門教育大学）

塚本研究室（障害者障害児心理学）

当研究室では，知的能力障害や自閉スペクトラム症などの神経発達症（いわゆる知的障害や発達障害）のある人々への支援を念頭におきつつ，私たちの身の回りで起きる行動問題を解決するための研究を行っています。

2022年度は，教員１名，大学院修士課程２名，学部10名（４年生：５名，３年生：５名）の体制でスタートしました。修論や卒論のキーワードは，加害者・被害者役割，発達障害とスティグマ，余暇活動支援，あがり，将来の出来事の予測，グループ体験，絵本の読み聞かせなど，さまざまです。新型コロナウイルス感染症への対策が求められる状況に変わりはありませんでしたが，今年度は夏季にサテライトキャンパスでゼミ１日集会を開催することができました。４年生は卒業研究を，３年生はじぶん実験（プレ卒論）の進捗をそれぞれ発表し，その後は少しばかりですがレクリエーションの時間も設けて親睦を深めました。卒業研究では，オンライン調査に加えて，対面での計測・実験が行われております。４年生の皆さんは就職活動や進学準備に追われながらも，研究成果を懸命にまとめようとしています。３年生の皆さんは，論文や診断マニュアルなどを読み込みながら神経発達症について理解を深めるとともに，じぶん実験の取り組みを通じて卒業研究のために必要な知識と技術を習得しているところです。

研究活動

辻愛里・塚本匡（2022）. RTK-GNSS を用いた子供の屋外遊びにおける対人距離計測　ヒューマンインタフェースシンポジウム2022.

社会的活動

調布市児童青少年課障害児等入会審査会 審査委員

中沢研究室（知覚心理学）

この研究室は知覚心理学の領域を主に扱っていて，外界からの感覚・知覚的情報を心がどのように処理しているかについて，またその結果として生じる知覚像がどのような性質をもっているのかについて調べる研究を行っています。これまでの学生さんによる研究は，「感じられる時間の歪み」「文字の読みやすさの要因」「フォントによる語の印象への影響」「言語の情動価と記憶」「偶発学習と記憶」「motion induced blindness（運動する刺激によって周辺視野の静止刺激が知覚されなくなる現象）」「視覚情報による嗅覚情報への干渉」「音楽の印象をつくる要因」「視覚と味覚の相互作用」「植物の存在によるパフォーマンスへの影響」「ラバーハンドイリュージョン」などのテーマでなされてきました。今年度在籍している大学院生は，時間知覚についての研究を行っており，刺激のシークエンスとその時呈が知覚時間に及ぼす影響を調べることによって，ヒトが感じる時間がどのように作られているのかについて考察しようとしています。

令和４年は，３年生２名と一緒に，読解に音声情報が与える影響，味覚イメージと視覚イメージの関係性，といったテーマで知覚認知の研究を構築しようとしています。

松嶋研究室（犯罪心理学）

当研究室では，主に犯罪・非行心理学の研究をしております。令和４年度は，修士２年，学部４年生５名，３年生６名の計13名が所属しております。ゼミ生はそれぞれの興味・関心に基づいてテーマを設定し，研究を進めています。学生の研究テーマは，刑務所出所者に関する知識がスティグマ及び社会的距離に及ぼす影響や，性犯罪被害者への非難に関する研究といったいかにも犯罪心理学らしいものから，キャラ化の視点から考える大学生の自己開示についてなど臨床心理学的なものまで幅広いです。

ようやくコロナ禍の影響がかげりを見せており，今年度は安定的に対面によるゼミナールが実施できてよかったです。宿泊を伴うゼミ合宿は控えましたが，来年度には実施できるのではないかと期待しております。

新たにはじめたものとして，昨年度末ゼミナール論集の第１巻を発刊しました。第１巻では４年生の卒業論文６本を収録し，定期刊行物として国会図書館にも納本しました。今年度は３年生の成果物も何かしらの形で収録できるように検討しています。

その他，神奈川県警の少年相談・保護センターの委嘱を受け，２名の学生がボランティアとして，思春期の少年・少女の支援を行っています。

諸活動

執筆

後藤日奈子・松嶋祐子・下斗米淳（2023）. 社会的排除における自動性と自己制御の機能　専修人間科学論集心理学篇，*13*（投稿中）.

社会的活動

東新宿こころのクリニック カウンセラー

吉田研究室（発達臨床心理学）

令和４年度の構成メンバーは，大学院２年生２名，学部４年生６名，３年生６名です。大学院２年生は，修論研究を進めています。研究テーマのキーワードは，認知・行動療法の効果・メタ分析，理想自己・現実自己・自己受容です。

４年生も，卒論研究を進めています。研究テーマのキーワードは，ペット動物への愛着・ストレス軽減効果，アタッチメントスタイル・ストレスコーピング，自己愛傾向・援助要請，夫婦間葛藤認知・抑うつスキーマ，親子関係・結婚観，適切な自己開示・ソーシャルサポートです。

今年度は，新型コロナウイルス感染症拡大は収まっていますが，調査の開始が遅かったために，修士論文，卒業論文の調査が思うように進まず，研究の進展が危ぶまれましたが，なんとか研究が進み，論文の提出が近づいています。

学部３年生もほぼ研究テーマが決まってきており，研究のまとめに向けて，分析を進めているところです。よい研究がまとまることを期待しております。

今年は夏のゼミ合宿も，歓迎会もできませんでした。そのため，３年生と４年生の交流が少ないのが残念でした。

私は今年度をもって定年退職しますが，後任の先生が決まって発達臨床心理学研究室は存続します。今後も発達臨床心理学研究室が活発な研究活動，教育活動を続けていくことを願っております。

諸活動

吉田弘道（2022），育児不安を測定する尺度と評価，保育と保健，28，１，98-101.

学会活動

亀口憲治，浅田剛正，田村大輔，樋口純一郎，山崎玲奈，仲田行重，青木紀久代，菅野信夫，高田晃，瀧口俊子，馬場禮子，繁多進，平井正三，平野直己，深津千賀子，吉田弘道　大会委員会企画シンポジウム（子育て支援合同委員会共催），子育て支援から見える「私の心理臨床学」―子育て支援未来と課題―，日本心理臨床学会第41回大会，2022．９．２～25．神戸，オンライン

社会的活動

日本小児精神神経学会代議員

日本小児保健協会 小児科・小児歯科保健検討委員会委員

日本臨床心理士資格認定協会・日本心理臨床学会・日本臨床心理会による臨床心理士子育て支援合同委員会委員

川崎市子ども・子育て会議委員

公益財団法人 成長科学協会 心の発達研究委員

東京都母子保健運営協議会委員

Ⅲ．卒業論文題目

佐藤 優斗　オンラインゲーム上の人間関係と攻撃性とうつ性の関連性について

小野 貴広　共感性が評価懸念とコストバイアスに与える影響

小嶺 幸司　援助利益の促進による援助要請の促進研究

本田 真由　音楽聴取による情動誘導が幼児の実行機能に及ぼす影響

玉越 七生　ペット動物の愛着がストレスの強さと精神的健康に与える効果について

坪　菜摘　日常におけるかかわりが青年期のメンタルヘルスに及ぼす影響 ―PCA グループの観点からの検討―

佐藤 恭葉　デートバイオレンスにおける合理化尺度の作成と自由記述による検討

山田 健太郎　性暴行中において性被害者男性が示す性的反応に対する第三者評価の検討

前田 遥香　アタッチメントスタイルと対人ストレスコーピング，および精神的健康について

天野 実緒　簡易的な対処法としての呼吸法がスピーチ中のあがりに与える影響 ―大学生を対象にした注意訓練との比較検討―

小林 柊一郎　認知的負荷が嘘に及ぼす影響

林　愛莉　両親の養育態度が結婚観に及ぼす影響

大島　楽　情動知能は本当にストレスを抑制するのか？ ―情動知能およびストレス反応の下位概念ごとの検討―

藁科 佳奈　パニック症に対するリラクセーション法の作用の検討 ―数理モデルを用いたシミュレーションによる検討―

大谷 萌絵　居心地の良さは関係性によって変化するのか ―親密化段階ごとの対人場面の視点と相互依存性の観点から―

市田 千晴　甘味と向社会的行動の関連検討

高橋 りりの　物語体験における読み返し・見返し

大久保 南　絵本体験のスタイルの違いが大学生のストレスに及ぼす影響：読み聞かせと一人読みによる比較検討

隅田 昌孝　社交不安症の認知モデルに関する形式理論化の試み

安達 直誉　自我消耗の妥当性の検討 ―自我消耗と精神疲労を比較して―

下鶴 惣真　自己肯定感と身体的自己概念について

中川 結莉香　居場所感と被援助志向性が孤独感に与える影響

大須賀 敬太　自己受容と他者受容のバランスおよび抑うつとの関連

大橋 怜奈　絵文字の使用個数が対人印象に与える影響

石島 琉々華　オンライン授業の導入・授業形態・性格因子が大学生活における意欲に与える影響の検討

村松 壮樹　飼育環境の違いがキンギョ（Carassius auratus）の学習能力に及ぼす影響

今井　怜　性的嫌悪感と性格特性の関連

波多野 蒼　自己愛傾向者における援助要請スタイル及び反応スタイルの特性と抑うつ・不安への影響

東田 玲花　顔画像の閾下呈示が及ぼす認知課題への影響

下郡　旺　競技未経験者におけるプレッシャー状況下での

パフォーマンス向上
森山 夏衣　受け容れがたい事象への多様な意味づけ様態についての検討 ―意味づけが自己受容をどのように規定するのか―
加藤 かいな　自己中心性が反社会的行動に及ぶ影響
浅野 直人　言語教示による内的文脈が身体所有感に与える影響
松山 沙央理　マウス網膜神経節細胞の同期発火に運動刺激の連続呈示が及ぼす効果
工藤 彩乃　心理学生における自律的な学習動機づけ像の検討
島田 朋奈　舞台芸術における感動体験
中村 珠美　刑務所出所者に関する知識がスティグマ及び社会的距離に及ぼす影響
上田 芽依　ルイス・キャロルと桜庭一樹の描く「少女性」についての比較と考察
栗原 捺樹　青年期における一人称の使い分けとペルソナの関連性
那須 幸宜　唾液アミラーゼを指標とした音楽がストレスに及ぼす効果の検討
池田 彪流　協力が笑顔に対する信頼度に与える効果
比佐 芽生奈　スマートフォンの背景色が VDT 作業時の身体的負担や作業意欲に及ぼす影響
小田 遥加　嫉妬の生起および，その後の影響について ―嫉妬の性質および嫉妬の原因帰属の観点から―
櫻井 俊輔　自己内省及び自己開示能力が自律的調整方略へ与える影響の検討
坂本 奈穂　コロナ禍が殺人事件の量と質に及ぼした影響
森　友香　青年期の子どもによる夫婦間葛藤の認知と抑うつスキーマおよびネガティブな反すう傾向との関連
鈴木 茜　放課後等デイサービスにおける発達障害のある子どもに対するアナログゲームを用いた余暇活動支援に関する研究
郷上 由茉　利用する SNS の種類による主観的幸福感の違いと SNS 利用から起こるネガティブ感情への対処法の検討
加藤 珠夏　不安抑制の生起に作用する制止学習過程の検討
伊東 宏晟 「キャラ」を介した付き合い方が友人関係に与える影響について
岩井 海亜　各種栄養素の摂取行動がセルフコントロールに及ぼす効果
小笠原 真白　自己開示と援助要請の両立機序に関する検討 ―相談相手との関係性についての意味づけの観点から―
本山 陽菜　モラルライセンシング効果が他者の印象評価に与える影響について
大島 あすか　蛙化現象になり得る心理的原因の検討について
村上 明日香　対人ストレスコーピングと過剰適応における自傷傾向との関係性
村口 ゆら　心理学的ネットワーク分析を用いたスポーツのパフォーマンスと情動の関係
竹本 周平　M―1 グランプリでは，どのようなネタだと点数が高くなるのか
佐藤 日南　事象関連電位を用いた転置文字列の処理過程の検討
堀越　萌　自尊心と表情に対する敏感さの関係
伊東 快晴　楽観性・悲観性が将来の出来事に対する予測に及ぼす影響
高橋 さくら　回転錯視を利用したゼブラフィッシュの追従行動の研究
高橋 創人　自我の混乱と思春期の内的世界 ―新世紀エヴァンゲリオンと Serial Experiments Lain に見る原初的一体感―
中村　涼　ほめを与えるエージェントの違いが幼児・児童のその後の課題の動機づけに与える影響について
リ ギョクリュウ　アクションゲームを用いた work ethics の検討
藤崎 まみ　自己受容・他者受容を指標としたコロナ禍における大学生の友人関係の変化の検討
佐藤 敬仁　被害者の社会的立場が加害者に対する第三者罰の程度に与える影響の検討
芦口 竜斗　名前表記の親近性と自尊心が視覚的認知処理に与える影響
寺内 悠祐　潜在的パターン知覚と心的回転能力の関係
木場田 光陽　適切な自己開示とソーシャルサポートの関連，及びストレス反応に与える影響についての検討
石田 鈴音　抑うつが攻撃性，衝動性を介して攻撃行動に与える影響の検討
岡野 真由　PTSD における持続エクスポージャー療法と EMDR の比較 ―ネットワークメタ分析による検討―

Ⅳ．優秀卒業論文

藁科 佳奈　HP19-1012F（指導教員：国里 愛彦）
小笠原 真白　HP19-1057B（指導教員：下斗米 淳）
村口 ゆら　HP19-1063F（指導教員：国里 愛彦）

Ⅴ．修士論文題目

田中 嘉彦　視線のパーツベース処理と逆空間ストループ効果 ―倒立顔効果と表情による検討―（大久保・石金）
長谷川 舞　個人を取り巻く対人的環境との間で生じる個人志向性と社会志向性の持ち方による不適応様態の検討 ―個人―環境適合達成のための臨床的介入への示唆の検討―（加藤・下斗米）
渋谷 勇樹　投影法を使用した，陰キャ・陽キャ概念とアイデンティティの関連の検討（高田・池田）
齋藤 裕希子　内受容感覚への意味づけと関わり方の不安に対する影響（国里・石金）
坂井 恵実　性格表現のための感覚形容語（高田・中沢）
菊池 太賀　概日リズム障害に関する基礎的研究（岡村・石金）
茅島 由佳　理想自己と現実自己の差異と自己受容の関連 ―自己受容の評価的側面・感覚的側面に注目して―（吉田・澤）

田宮 萌夢　児童青年期における怒りに対する認知行動療法の効果研究 ―メタ分析による検討―（吉田・小杉）
山田 日菜子　ストレス状況下において社会的比較が精神的な健康状態の自己評価及びその後のストレス対処に与える影響（加藤・小杉）
成見 果歩　加害者・被害者から見た対人葛藤の捉え方と共感性について（塚本・小杉）
増田 海都　身体感覚レベルの評価を含めたトランスアクション・モデルの検討（加藤・大久保）

Ⅵ. 修士論文研究優秀ポスター発表

最優秀賞　田中　嘉彦　ML21-7001H
（主指導：大久保街亜，副指導：石金浩史）
優 秀 賞　増田　海都　ML20-7003K
（主指導：加藤佑昌，副指導：大久保街亜）

Ⅶ. 博士論文題目

杣取 恵太　恐怖条件づけの獲得・消去にメタ認知が与える影響（指導教員；国里愛彦）

専修大学心理学研究室専任構成員の在職歴

開設・改組	年度		人格	学習	生理	知覚	発達	社会	臨床	認知	発達臨床	臨床心理査定	犯罪	臨床神経リハビリテーション	障害（児）	心理統計	特任教授	助教	実習助手		他学部専任教員		
文学部人文学科心理学コース	S42	1967	重松 毅	金城 辰夫	河内 十郎	中谷 和夫													野口真知子				
	S43	1968																			梢山喜代子[経済]	中野繁喜[経営]	
	S44	1969																					
	S45	1970				↓																	
	S46	1971				（退職）																	
	S47	1972				高橋 澪子													（上野直子）				
	S48	1973			↓														伊藤 博子				
	S49	1974			（退職）																		
	S50	1975			東條 正城								森 武夫[法]										
	S51	1976																					
	S52	1977	（在外）																				
	S53	1978																					
	S54	1979					山上 精次																
	S55	1980																					
	S56	1981																					
	S57	1982																					
	S58	1983		（在外）																			
	S59	1984																					
	S60	1985																					
	S61	1986										藤岡新治[商]											
	S62	1987			（国内）																		
	S63	1988	↓					岡 隆															
	H1	1989	（定年，名誉教授）																				
	H2	1990	岡村達也																				
	H3	1991					（在外）																山下 清美[経営]
大学院文学研究科心理学専攻修士課程	H4	1992						↓	岡部 祥平											志村由起枝（H4，9～）		↓	
	H5	1993						（退職）														（定年，名誉教授）	
大学院文学研究科心理学専攻博士課程	H6	1994								中谷 和夫（再）				宮森孝史[経済]									
	H7	1995						下斗米 淳															
文学部心理学科	H8	1996	↓			↓														↓			
	H9	1997	（退職） 乾 吉佑			（退職）														（退職）			
	H10	1998											↓							波田野由美			
	H11	1999		↓	↓	中沢 仁			↓				（定年，名誉教授）		坂爪 一幸[法]								
	H12	2000	↓	（定年，名誉教授）	（H13.2/3逝去）				（定年）		吉田 弘道		村松 励[商]	（国内）	↓						↓		↓
	H13	2001	（→臨床）	廣中 直行					高田夏子(→人格)				[ネットワーク情報]		（退職）						（定年，名誉教授）		[ネットワーク情報]
	H14	2002	高田夏子(←臨床)		岡田 隆				乾吉佑(←人格)												青木みのり[経済]		
	H15	2003		↓										↓	長田 洋和[法]						↓		
	H16	2004		（退職）						↓				（退職）							（退職）		
	H17	2005						（在外）		（定年）									↓				
	H18	2006	（在外）	澤 幸祐	↓					大久保街亜				岡村陽子[経済]					（退職）		角田真紀子[経済]		
	H19	2007			（退職）														小川さや夏				
	H20	2008			石金 浩史							（国内）											
	H21	2009							（国内）			↓	↓	↓	↓（在外）				↓				
人間科学部心理学科	H22	2010				（国内）						[人間科学部]	[人間科学部]	[人間科学部]	[人間科学部]	岡田 謙介			（退職）				
	H23	2011							↓				（国内）						榎本 玲子				
	H24	2012							（定年，名誉教授）		（国内）												
	H25	2013							国里 愛彦														
	H26	2014												（在外）									
	H27	2015										（特任教授）				（在外）		久方瑠美					
	H28	2016			（在外）							↓				↓		↓					
	H29	2017					↓					（定年，名誉教授）	↓			（退職）		（H29.4退職）					
	H30	2018					（定年，名誉教授）					加藤 佑昌	（定年，名誉教授）			小杉 考司							
	R1	2019					池田 彩夏		（在外）				松嶋 祐子		（退職）								
	R2	2020															高澤 知子						
	R3	2021						（国内）							塚本 匡			石川 健太					
	R4	2022	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓		↓
			高田 夏子	澤 幸祐	石金 浩史	中沢 仁	池田 彩夏	下斗米 淳	国里 愛彦	大久保街亜	吉田 弘道	加藤 佑昌	松嶋 祐子	岡村 陽子	塚本 匡	小杉 考司	高澤 知子	石川 健太	榎本 玲子	波田野由美			